

令和3年2月26日

第5回翻訳者育成事業（翻訳コンクール）の結果について

文化庁では、文芸作品の優れた翻訳家を発掘、育成するため、令和2年6月より公募してまいりました第5回翻訳者育成事業（翻訳コンクール）について、この度、受賞者を決定しましたのでお知らせします。

1 趣旨

優れた翻訳者を発掘、育成することにより、我が国の文学を世界に発信する土壌を醸成し、もって文学活動の奨励と振興に資する。

2 応募数

応募人数：英語部門 121名 ドイツ語部門 45名

選考対象作品：英語部門 115名（230作品） ドイツ語部門 44名（88作品）

3 受賞者（カッコ内は国籍）

英語／最優秀賞（1名） リチャード・ドノバン（ニュージーランド、イギリス）

優秀賞（2名） アンジェロ・ウォン（香港）

手嶋優紀（日本）

ドイツ語／最優秀賞（1名） ロビン・ヴァイヒャート（ドイツ）

優秀賞（2名） ジャネット・クラウス（ドイツ）

柳田ネンシ（ドイツ）

○現代日本文学翻訳・普及事業 第5回翻訳者育成事業（翻訳コンクール）概要

1 応募資格

国籍、年齢は問わない。ただし、本事業の主旨が、翻訳家を目指す者の育成であることから、翻訳作品の単行本（共訳を含む）の出版経験を有する者は応募できない。なお、雑誌・アンソロジー等での掲載経験は可とする。

2 翻訳作品受付期間 令和2年6月1日（月）～7月31日（金）

3 課題図書

(1) 小説部門

野坂昭如・著「東京小説 家庭篇」または伊藤比呂美・著「みんなのしつと」のどちらか

(2) 評論・エッセイ部門

谷川俊太郎・著「思いつめる 教育について 前提として」または田辺聖子・著「ヒロインの名前」のどちらか

4 翻訳点数 小説部門、評論・エッセイ部門の各1点、計2点

5 翻訳言語 英語またはドイツ語

6 賞 各部門 最優秀賞（1名）、優秀賞（2名）

最優秀賞及び優秀賞の受賞者には、賞金（最優秀賞100万円、優秀賞25万円）、賞状及び賞牌を授与。

7 審査委員（敬称略，五十音順）

【英語部門】

井上 健（比較文学者，東京大学名誉教授）

マイケル・エメリック（翻訳家，日本文学研究者，カリフォルニア大学ロサンゼルス校上級准教授）

スティーヴン・スナイダー（翻訳家，日本文学研究者，ミドルベリー大学教授）

ジャニーン・バイチマン（翻訳家，日本文学研究者，大東文化大学名誉教授）

【ドイツ語部門】

池田信雄（ドイツ文学者，東京大学名誉教授）

イルメラ・日地谷＝キルシュネライト（日本文学研究者，ベルリン自由大学日本学教授）

エドゥアルド・クロッペンシュタイン（日本文学研究者，チューリッヒ大学名誉教授）

松永美穂（ドイツ文学者，早稲田大学文学学術院教授）

4 コンクール授賞式及びシンポジウム

日程：令和3年3月7日（日）14：00～16：00

会場：オンライン配信

（1）授賞式

（2）記念シンポジウム「2021年、世界文学と日本文学の景色」

5 問い合わせ先

現代日本文学翻訳・普及事業（JLPP）事務局

東京都千代田区神田猿樂町1-5-1-6F

ホームページ <https://www.jlpp.go.jp>

電話 03-5577-6424 電子メール jlpp_office@jlpp.go.jp

＜担当＞文化庁参事官（芸術文化担当）付

文化戦略官 所 昌弘（内線 2858）

参事官補佐 時川 修司（内線 2084）

文化創造係 亀井 武志（内線 4782）

文化創造係 澤村 迪（内線 2082）

電話 03-5253-4111（代表）

03-6734-2081（直通）

第5回翻訳者育成事業（翻訳コンクール）講評

○英語部門審査講評

今回、課題文を小説部門、評論・エッセイ部門ともに複数掲げて、応募者が自由に選択できるようにしたのは、昭和以降に限っても95年を超える日本近代文学の厚みと多様性を実感しつつ、課題に取り組んでほしいと願ったがゆえだった。しかし、応募総数が桁違いに多かったこともあって、最終選考に残った訳文はどれも水準が高く、2部門で計4通りの組み合わせの応募作から上位3点を選び出す作業は困難を極めた。

伊藤比呂美「みんなのしつと」は、新聞連載の身の上相談を元に書かれた作品。ウィットに富んだ実践的アドバイスを披露しながら、嫉妬にまつわる踏み込んだ考察が、江戸弁をまじえた自在な話法で、ときに箴言風に展開される。話の筋道はしっかり立っている作品なので、語り口の妙や江戸言葉の効果をどう再現するかが訳出上のポイントとなる。野坂昭如「東京小説 家庭篇」は、連作短篇集『東京小説』の冒頭に掲げられた一篇。「私」が公園で出会った女の語る「東京の物語」を、「私」が「東京小説」として語り直すという仕組みになっている。時代背景や歴史的事実（例えば、昭和20年3月10日は東京大空襲の日）、風俗的事象を的確に把握した上で、野坂独特の句読点の感覚と、うねるように連なりつつしかもテンポのよい文体を、いかに移し替えるかが課題となる。樋口一葉「たけくらべ」を彷彿させる冒頭の2つの段落が難しい。なお「つまりは「可愛い女」であろう」の「可愛い女」は、チャーホフの同名の短篇（1899）およびそのヒロインを指して言ったものである。

田辺聖子「ヒロインの名前」は、人名に焦点を絞ったヒロイン論、女性論。女性名（漢字、訓読み双方）にまつわる、ただローマ字化しただけでは伝わらない知見を、訳文本体にどこまで盛り込めるかの戦略が問われる。谷川俊太郎「思いつめる ほか」は、事の本質を、自ら吟味した概念や表現を用いて、実感を込めて端的に表現したもの。原文の抽象概念をどこまでかみ砕いて訳すか、あるいは抽象名詞に置き換えるべきかの見極めと選択が焦点となる。

最優秀賞のリチャード・ドノバンさんの訳文は、ときに「同化」型の訳法に傾きすぎる箇所も散見されたが、原文のスタイル、語り口への配慮がくまなく行き届き、翻訳文学としての完成度からして一頭地を抜く出来栄であった。優秀賞のアンジェロ・ウォンさんは、気になるミスもいくつかあったが、野坂原文の、脱線や迂回を重ねながら駆け抜ける饒舌さを、果敢に再現しようとした点は評価に値する。同じく優秀賞の手嶋優紀さんは総じて訳文のテンポがよく、田辺聖子の作では、固有名詞談義の脚注的情報を訳文本文の中にうまく取り入れる工夫が光った。最後に、今回惜しくも入賞を逃した投稿訳文の中にも、翻訳家としての豊かな可能性を感じさせるものが少なからずあったことを、ぜひとも付言しておきたい。

井上健

JLPP 翻訳コンクールの審査委員会に参加させていただくのは今年で四度目だが、毎年、応募作品をととても楽しく拝読している。翻訳に初めて挑戦する方から、何年も前から訳文を練り上げる醍醐味にヤミツキになっている熟練者まで、さまざまなバックグラウンドの方々の訳文を読むことによって、文学、言葉そのものの味わいに改めて気づかされる。

本年度のコンクールの応募者数は従来よりも多かったようで、全体として訳文の質もきわめて高かったという印象をいただいた。そのなかでも、最優秀賞に選ばれた **Richard Donovan** 氏の手がけた英訳作品は、群を抜き、本当に素晴らしかった。翻訳対象のひとつであった谷川俊太郎氏のエッセイ「思いつめる」には「**思**うという行為は、**考**えるという行為に比べて、より感情的であり、より不正確である」という箇所があるが、**思**うと**考**えるという言葉の違いを Donovan 氏は **think of** と **think about** と、前置詞をもって表現していた。なかなか思いつかない、形相に惑わされないこの翻訳には、私は舌を巻いた。伊藤比呂美氏の「みんなのしつと」の英訳における方言の使い方も、生き生きとしていて、文章が冴えていた。

優秀賞に選ばれた **Angelo Wong** 氏と手嶋優紀氏の訳も、またそれぞれ、Donovan 氏の訳とも、スタイルも、原文に対する姿勢も異なっていたが、二人とも翻訳対象の作品を深く、丁寧に読みこんでおり、独特の感性を持つ、説得力のある文章になっている。

Richard Donovan 氏、**Wong** 氏、手嶋氏という3名の受賞者をはじめ、受賞には至らなかったけれど、丁寧に、味のある、力強い訳文を提出された多くの応募者が、これからも翻訳に携わり、ご活躍を続けていくことを心から願っている。

マイケル・エメリック

私たちは第5回 JLPP 翻訳コンクールの一連の応募作品を読み、今回の選考結果を大変喜ばしく感じている。課題作の小説とエッセイはいつも以上に難易度の高いものだったが、応募者は全般的に質が高く、いずれも優秀な候補作品の中から受賞作を選ぶことは困難であった。すべての応募者へ祝福の意を表すと共に、それぞれ優れた翻訳を続けてほしいと願っている。

ただ最終選考において、私たち審査委員にはまれにみる意見の一致があったと思う。受賞した3作はどれも優れた翻訳作品だが、最優秀賞を受賞したリチャード・ドノバンさんは最も力量があった。私は特に、彼が伊藤比呂美「みんなのしつと」における独特のなまりをあえてリスクをとって翻訳し、原作のピリッと薬味の効いた言葉遣いを英語で表現したことに感心した。なまりや方言の翻訳というものは文学翻訳の中で最も難しい扱いの一つだ。翻訳者の多くは方言を翻訳しないが、文芸翻訳初心者であるドノバンさんが伊藤作品に挑戦し、成功したことは実に見事だった。

同様に、優秀賞2名の作品はどちらも正確な翻訳がなされ、かつ、作品の文学的価値を体現する優れたものだった。アンジェロ・ウォンさんの谷川俊太郎の翻訳、手嶋優紀さんの田辺聖子の翻訳にみられる明晰なスタイルと洗練された表現には強く印象づけられた。

JLPP 翻訳コンクールからは、日本文学の英語翻訳において新しい才能が次々と生まれている。現在、日本文学は世界の文学界から注目され評価を高めているが、今回の3名の受賞者がそれに貢献してくれることを期待してやまない。

スティーヴン・スナイダー

今回の応募作品は、私がこれまで見てきた中でおそらく最も優れたものがそろい、受賞作の決定はいつにも増して容易ではなかった。最終選考に残った20名の応募者はどなたも表彰に値する。応募者の方々のために、審査員の一人として私がどのように審査したかについて述べたいと思う。

私の審査過程には幾つかの段階があった。最初に原作を読んだのはコンクールの1年前、課題作品を選考したときである。そして審査会議の数カ月前に再度読み込み、最終選考に残った20名の翻訳40作に臨んだ。

まず、一つの作業をしながら全ての翻訳作品を読んだ。その作業とは、訳文の中に英語としてとても良い響きの一節があれば、日本語原文に戻って全体的にも細部においても正確に訳されているかをダブルチェックすることだ。もしミスがなければ、その節の横に大きな赤い印を付けた。(実に秀逸だったり思い切った表現だったりすれば、感嘆符や「すごい」といったマークを記した。)一方、英語としてぎこちない表現があれば”awk”と記し、ミスがあれば“X”印をつけた。

この最初の査読では、比較のために課題作ごとに応募原稿をまとめて読んだ。(ちなみにそれによって、各課題作を何名の応募者が選んだかが分かった。多くの方に田辺聖子「ヒロインの名前」が選ばれたことは嬉しかった。というのは、それを課題作として推薦したのは私であり、人名が翻訳不可能に見えてどれだけ難しい挑戦となるかを知っていたからだ。)

その次に、応募者ごとに小説部門、評論・エッセイ部門の2作品の翻訳を読み合わせ、比較した。例えば、ある応募者は課題作の小説の翻訳は優れていても、エッセイの翻訳はそれほど良くないかもしれない。こういう場合、選考にさらなる難しさが生じた。

前述したが、今年の実験作品の質は非常に高く、大きな誤訳はほとんどなかったため、ミスがあるかどうかという判断基準は早々に捨てた。そのかわりに、残る選考過程においては、黄色の蛍光ペンで気に入った箇所をハイライトしていく作業を楽しんだ。課題作それぞれの難所を余白に記しておいたのだが、特にそれらをどう訳しているかを見ていったのだ。例えば「東京小説 家庭篇」の冒頭、明らかに樋口一葉「たけくらべ」の最初の一文を意識した見事な長い文章。そして狸のイメージが出て来る最後の場面。「ヒロインの名前」では、すみれをめぐる愉快的な描写。「みんなのしつと」では地球温暖化から嫉妬へと話に移る冒頭の部分。そして谷川俊太郎のエッセイにおける「思いつめる」という厄介な言葉。私には、最優秀賞受賞者が「みんなのしつと」のトーンを完璧に掴んでいたことが強く記憶に残っている。彼は思い切った種々なまりやスラングを多用して翻訳したのだが、そのやり方はうまくいっていると感じた。

次に最終過程として、応募作品を読み直し、気に入って印をつけた部分が、その応募作に対して私が抱いた全体的な感じと一致するかどうかを見た。私の全体的な感じとはあいまいな言い方なので説明する。

私はこれまで述べたような2回のリーディング、マーキング、書き込みを行っているとき、

常に文章の響きにも注意深く耳を傾けている。この文章は原作と同じ響きを持っているだろうかと自問する。それこそが最も重要なポイントなのである。

さらに詳しく説明してみよう。今回の応募作品を繰り返し読む過程において、私はこれまでに以上に、翻訳には2つの種類があると感じた。一つは私の言葉で言うところの「報告」、原文の内容を報告するというもの、もう一つは「再生」、原文を再生するというものだ。この二つは異なる世界のものである。前者では、翻訳者は原文の内容を報告しているような感じだ。翻訳が出来てはいるが面白味はない。まるで内容の要約のような、原作について報告するだけの、「について」というものだ。翻訳によって移し替えられた表現は明晰ではないが、どの言葉も訳出され、英語圏の読者が理解できない用語が含まれていることはない。この種の翻訳はいろいろな意味で正確かもしれないが、逐語訳とほとんど変わらないものだ。

もう一つの、私が「再生」と呼んでいる翻訳は、翻訳者が作品の中に入り込んで、作品の内側から語っているように感じるものだ。翻訳者の声が著者の声と融合し、原文のパラレルワールドが生まれ出ている。原作が別の言語を媒介したのではない生のものとして聞こえる。テキストに固有の強いヴォイスがある場合は、これがとりわけ重要だ。

翻訳者が原作の中に踏み込んで著者と共に語れば、喜びをもって何度も読み返したくなる翻訳となる。たとえ小さなミスはあっても問題ではない。なぜなら肝心なことはヴォイスが伝わるからだ。受賞作品はすべて、このような資質をある程度持っていた。それがどの翻訳者も目指すべき理想である。

そういった力をどうしたら培うことができるだろうか。多くの方法があるが、確かなやり方の一つとして、課題作品を出来る限り声に出して読み上げ、自分の翻訳も声に出して読み続けるということを推奨する。

ジャーニーン・バイチマン

○ドイツ語部門審査講評

第5回 JLPP 翻訳コンクールドイツ語部門は応募者が45名、本審査へ進んだ候補者が14名と予想をはるかに上回る盛況だった。2020年はドイツ語圏で村田沙耶香の『地球星人』と川上未映子の『夏物語』が翻訳され、大きな話題となった喜ばしい年でもあった。日本文学の新展開が予感されるなか、ドイツ語翻訳者の分厚い層が形成されることを願いつつ審査に当たらせてもらった。

今回の課題作は、小説部門が伊藤比呂美の「みんなのしっと」、野坂昭如の「東京小説 家庭篇」、評論・エッセイ部門が田辺聖子の「ヒロインの名前」、谷川俊太郎の三篇のミニエッセイ「思いつめる 教育について 前提として」だった。とつとつとした語り口の谷川のエッセイ以外は、どれも語り口こそ違え、延々と繰り広げられる話芸のオンパレードであり、随所で待ち受ける親不知のような行文の難関難所を挑戦者たちが果たしてうまく切り抜けられるか、はらはらどきどきの連続だろうと予想された。一見平易そうな谷川のエッセイも、ドイツ風の強靱な論理に従って論が粛々と運ばれるかということとそうでなく、うっかり言葉の文目を見落とすものならとんでもない迷路へひきずりこまれかねない危うさに満ちている。ことほどきょうにくせ者ぞろいの課題作なので若い翻訳家志望者たちの食いつき具合を心配していたのだが、45名が応募したことからして、彼らはみなこの難題に尻込みするどころか、果敢に挑んだことが分かる。

翻訳とは、原作のテキストを翻訳者の言葉でトレースする作業だ。ただし製図台の上では行えない。原作のテキストは生きていて動くから、翻訳者はその動きに合わせて、自分の言葉という身体で相手の動きを出来る限り忠実に再現してゆく。みごとなパドドゥが一貫されてはじめて翻訳は成功する。舞納めて残るのは原作が姿を消した跡の翻訳言語の舞の軌跡であり、これが理想的な翻訳作品なのだ。

原作の言葉にみなぎる気を訳者の言葉がどう受け止め自律した形姿へ立ち上げていっているか、その気合と達成度を見るのが私たち審査員の仕事である。ときとして訳者の言葉が原作の言葉の強さに弾き飛ばされてしまうケースがあるが、どこまでついて行けてどこどこで振り落とされたかが自覚できると自分の翻訳言語のしなやかさを伸ばす絶好のチャンスとなる。ぜひこの経験をもとに精進していただきたい。

最優秀賞のロビン・ヴァイヒャルトさんは伊藤比呂美の作品の後半に少し誤りがあったものの、谷川のエッセイの訳は安定していて両方とも読みやすく、将来が楽しみな翻訳家の誕生に立ち会えた感がある。

優秀賞のジャネット・クラウスさんは野坂の小説と田辺のエッセイを選んだが、野坂の訳に少々の難点が認められた。同じく優秀賞のナンシー・ヤナギタさんは伊藤の小説と田辺のエッセイだったが、こちらは伊藤の訳が傑出していたのに比べ田辺の訳にはそれほどの評点は付けられなかった。しかしお二人とも今後翻訳家として立つ素質は十分と感じられた。

池田信雄

JLPP 翻訳コンクールの審査は、この第5回が私にとって初めての経験であり、きわめて学ぶところが多かった。日本の作家の4作品を特定の視点から読む機会を得て、原作に潜在する意味および効果を目標言語で再現する多様な可能性を知ることができ、さまざまな訳を比較して、それぞれの長所と短所をルーペで見ると観察できた。どの訳にも一長一短があり、どの訳も完璧ではない。しばしば些細な誤り、不手際、誤解もある。問題個所により優れた訳も見つかる。テキストは「正確」に訳すべきだと言っても、さほど容易でもなければ単純でもない。正確さにも様々な側面がある。語の意味の正確な再現なのか、コンテキストの中での役割を担う表現のニュアンスを捉えることなのか。私からすれば、訳者がテキストのトーンを的確にとらえ、統一の取れた文体を探し当て、それぞれに適切な表現を与えることだ。

個々のテキストの難しさは、それぞれ異なる面に表れている。例えば野坂昭如作品の場合、確実に話の滑らかな流れを保ち続けることであり、技巧に流されず回りくどくならず、また例えば1945年3月10日という日付の意味が伝わる訳になっているかである。これに対し田辺聖子にあっては、軽やかでさらっとした筆致を再現しながらも、全体のどこを取っても共感できる訳でなければならない。難しいのは登場人物に与えられた名前で、日本語や漢字が分からなければそのコンテキスト（含意）は分からないが、多くの訳者はただテキスト通り訳しており、それでは伝わらない部分が出てくる。人名の個々の漢字の意味を説明する訳し方もあるが、その漢字を挙げていようとしまいと翻訳としては稚拙である。それより巧みな訳し方としては、その名がもつコンテキストを言い換えて説明することであり、例えば「和子」という名が好まれるのは昭和の「和」であるという説明だ。

もっとも複層的なテキストはおそらく伊藤比呂美の作品で、全体としては軽くユーモラスな感じも与えるが、その中には二つの異なるジャンルが織り込まれている。冒頭は典型的な落語の「枕」スタイルで、本題に入る前に語り手の女性が登場して、観客（読者）の注意と好奇心を呼び起こす。本題部分は人生相談の形をとっている。ひとつの訳は、こうした設定を特別な工夫によって見事に訳出していると思われる。一種の「地の文」をイタリック体で目立たせ、落語の「枕」のように語りの枠組みを提示している。また、「人生相談」の部分では、ドイツの人生相談欄によくあるように一人一人に適切な仮名を与えている。これによって、このテキストの本題部分がドイツの読者に際立つ構造になっている。さらに、この訳は他の訳とは異なり、落語の下町口調をベルリン方言に移し替えている。私自身は方言を別な言語の方言へと訳すことは問題があると考えますが、この訳の場合にはその効果に納得がいく。この訳は、オノマトペの創造的な転用などほかにも優れた点を持っているが、選考委員の中からはこうした創作的な訳は翻訳の枠を超えているとの意見も出た。それに対し私がこれを推薦したのは、きわめてプロフェッショナルな訳であると同時に、優れた翻訳がいかに幅広い形を取りうるかを誰の目にも示す良い機会であると考えたからである。

イルメラ・日地谷＝キルシュネライト

まず、今回の日本語からドイツ語への「第5回 JLPP 翻訳コンクール」が8年間の空白期間を経て開催され、45名もの方が応募したことは私にとって大きな喜びである。

さらに、応募者全員が時間をかけて今回の翻訳に取り組んだことは素晴らしいことだと思う。

最終審査の対象となった14名の翻訳作品は全般的に見て、相当高い水準に達していた。なので、今回受賞しなかった方も気落ちすることなく、これを機に日本文学のドイツ語への翻訳に挑戦し続けられることを希望する。

小説、評論・エッセイ部門の翻訳作品を審査するに当たり、私は、翻訳者が原作をよく読み込んで、原作者が作品に込めた思いを的確にとらえ、ドイツ語で表現し得ているか、また、原作の内容を正確に把握して翻訳し、ドイツ語の作品としても評価できるものに仕上げているかを基準に選考した。

最優秀賞、優秀賞に選ばれた方の翻訳作品は上記の審査基準を十分満たしている。

最優秀賞に選ばれた方の翻訳作品には、ほとんど誤訳がなく、翻訳者はテキストを正確に把握しているだけでなくドイツ語表現も文章の流れに滞りがなく、滑らかでスッキリしていて、読む者を作品の世界に引き込んでくれる。

優秀賞に選ばれた二人の翻訳作品は正確さ、文体の点で、多少問題はあるものの熟慮の跡がうかがわれ、作品としてまとまっていて、間違いなく優秀賞にふさわしい出来栄だ。

なお、付け加えておきたいのは、応募者の中に伊藤比呂美の作品中の江戸訛り風な語り口をドイツ語の方言で表現しようと試みた方がいた。翻訳能力は持っているようだし、大胆で興味深い試みではあるが、残念なことに自己流の解釈や翻訳が目につき、原作からはみ出ている箇所が多過ぎて、翻訳作品が原作の翻訳ではなく、改作的要素の強いものになってしまっていた。今後の成長に期待する。

クロッペンシュタイン・エドゥアルド

今回初めて JLPP 翻訳コンクール（ドイツ語部門）の審査委員をさせていただいたが、予想以上の数の応募があり、その中から最終選考に残った 14 人の方々の翻訳作品については、どれもレベルが高く、大変感心した。

そもそも、今回の課題作品はかなり難しかったのではないかと思う。野坂昭如「東京小説 家庭篇」の、「浮世のしがらみお上の取決め」『円』は栄える家並みは瘦せる」などの講談調の語り口や、一方的に身の上話をする女性の「主人は古いんです、今のところ」などの言い回し。伊藤比呂美「みんなのしっと」の落語調の江戸ことばと、手紙文の混在。谷川俊太郎「思いつめる 教育について 前提として」の、例えば「思想という言葉がふたつのくおもう」の積み重ねでできているのはおもしろい」という、漢字の知識を前提にした話。そして、田辺聖子「ヒロインの名前」には、文字通りたくさんの名前が列挙される。どのテキストにも難しいポイントがあり、ドイツ語でどのように処理されるのか、興味津々で審査に臨んだ。

最優秀賞に選ばれた **Robin Weichert** さんは、事前に提出した候補者リストで、4 人の審査委員全員が賞の候補として挙げており、文句なしの受賞だったと思う。間違いが少ない手堅い訳で、伊藤比呂美の翻訳では、大家さんと店子のユーモラスな掛け合いが、原文の勢いもそのままうまく再現されていた。また、谷川俊太郎の翻訳では、著者が使っている日本語のキーワードをイタリックで示しつつ、その単語の翻訳を示す、という丁寧な方法がとられていた。

優秀賞に選ばれた **Nancy Yanagita** さんの翻訳は、平易で読みやすいなかにも、よく原文の意味を伝えていたと思う。伊藤比呂美の「だけど大家さん、あなた、人も殺さぬ顔をして裏じゃそうとう……」の訳も面白かったし、田辺聖子の翻訳で、ヒロインたちの名前のイメージをさりげなく翻訳で伝えているところや、作品タイトルも原語の発音とともに意味を示しているところなど、読者への配慮が感じられた。

もう一人の優秀賞、**Janett Claus** さんは、野坂昭如の方はわりと淡泊な翻訳という印象だったが、田辺聖子の翻訳では注をつけ、ヒロインの名前をローマ字に直すだけでなく漢字も示しながらそれぞれの文字の意味を伝える、という方法をとっていた。日本語の名前のニュアンスをどうやってわかってもらうかという点で、工夫が見られたと思う。

個人的には、**Inga Neuhaus** さんの丁寧で文学的なセンスが感じられる翻訳に、好感を持った。また、**Anna Sanner** さんが伊藤比呂美をベルリン方言で訳したことは、大胆かつ成功した試みだったと思う。この翻訳は非常に面白かったのだが、原文にない文章が追加されているという理由で、受賞を逸した。

全員の作品に言及できないのは残念だが、優れた翻訳を読ませていただき、楽しい審査だった。応募された方々の今後にあこがれを送りたい。

松永美穂